

スーパー・リッチ スーパー・ブア
超富豪転じて極貧の生き直しと身体のコスモポリス
— Don DeLillo, *Underworld* (1997) と *Cosmopolis* (2003) をめぐって —

中 谷 ひ と み

百年もたてば、世界も様変わりする。市民社会の誕生や産業革命の時代と現在には、格段の違いがある。情報テクノロジーの革新を考えれば、十年前でも、大昔である。第三世代携帯電話やウェアラブル・コンピューターなど、だれが予測できただろう。確かに便利にはなった。時間の流れの中で変化は不可避であり、時間の流れとしての歴史は多くの作家の関心を引いてきた。Don DeLillo (1936-) も、*Underworld* (1997)¹で、個人史/家族史を書きながら1950年代から1990年代のアメリカを俯瞰している。この大作には、極貧の孤児ながら驚くべき生命力で生きる少女を描いた短篇“The Angel Esmeralda” (1994) がほとんどそのままに組み込まれている。大作『アンダーワールド』の後、比較的短いが身体、時間、言葉についての興味深い示唆を含む*The Body Artist* (2001)²を発表したデリーロは、*Cosmopolis* (2003) で高度テクノロジー社会と経済システム、そしてその覇者に焦点を当てている。主人公は貧者や人生の迷い人から、一転して超富豪である。しかし、この勝者には必ずしも生の躍動 (élan vital/life force) が感じられない。生き生きと、生を満喫しているようには見えないのだ。不可解なほどに自虐的だし、貧しかった頃や父親との生活に郷愁すら感じているようだ。

この小説で興味を引くのは、テクノロジーが目覚ましい発展やグローバル化の下での経済的革新や社会環境の変化を背景にした、主人公の欲望と身体のある様である。テクノロジーを駆使して大金持ちになった主人公は、自暴自棄とも言えるほどに、時代やシステムに抵抗しているように見える。『アンダーワールド』には、全体を通して見ると、より重要な人物であり語り手でもある Nick Shay がいて、エスメラルダはマイナーな登場人物にすぎない。しかし、資本主義とテクノロジーが進展しつつあるなかでの貧しい薄幸の少女と『コズモポリス』の主人公を、それぞれの時代背景とともに比較してみれば、ウェブ時代の言語、時間意識、暴力、そして欲望と身体という点で、作者デリーロの関心とメッセージの継続/深化に気がつく。『コズモポリス』は『アンダーワールド』よりさらに進行した社会・経済システムを描き、身体への考察も深まっている。

デリーロの顕著な特徴の一つとして、彼の言語や文体が挙げられる。彼自身、インタビューで、25歳頃にJames Joyce (1882-1941) の*Ulysses* (1922) を再読して、「その言語—特に最初から3あるいは4章まで—の美しさに魅了された」(DePietro ed. 138) と語っているし、「自分は正確な内容や意味に直接興味がなくても、詩人のように、言葉に反応する。…文のリズムや韻律が聞

こえ、文字の形が見える」(147)とも言っている。

It seems to me that I follow language as it makes its connections. Language does create a reality that I had not at all planned on. There's a sense in which I follow language in the way a poet does, openly, and without immediate concern about precise content, precise meaning. I have a curious audiovisual sense of language. I now hear a rhythm in my head, the beat and cadence of sentences, but I also see the letters as they take shape on the page. (147)

このような感性を持ち、言語が主要な関心事であると言えるデリー口だが、『コズモポリス』に書き込んだ主要なテーマが「力、テクノロジー、暴力、テロリズム、群衆、現代文化の動きや対抗文化」であることに、特に異論はなかろう。これらは*White Noise* (1985)、*Libra* (1988)、*Mao II* (1991) のテーマでもある。(Morrison) しかし本論では、エスメラルダとEric Packerに焦点をあてて『アンダーワールド』と『コズモポリス』を読みたい。グローバル化とテクノロジーの言わば「高原^{plateau}」期に、人間の欲望や身体はいかなる様相を呈してくるかについて、興味深い示唆が得られる。

1. 天使エスメラルダという希望

独立した短篇「天使エスメラルダ」が『アンダーワールド』に組み込まれると、少女の生きた環境がより明確になる。デリー口はエピソード「*Das Kapital*」で、語り手に、冷戦時代が終息してテクノロジーが目覚ましく発展していく現代の特徴を語らせている：「資本が文化内の微妙な差異を焼き尽くし、海外投資、世界市場、企業買収、超国家的メディアが運ぶ情報の流れ、電子マネーとサイバーセックス」(785)が蔓延り、「まがい物の画一性があらゆるものに浸透している。」(786)固有性/独自性が希薄になっただけではない。グローバルなサイバー空間では、国家も生産様式や経済も、そして身体性やセックスも、かつてとは異なるありようになる。

Capital burns off the nuance in a culture. Foreign investment, global markets, corporate acquisitions, the flow of information through transnational media, the attenuating influence of money that's electronic and sex that's cyberspaced, untouched money and computer-safe sex, the convergence of consumer desire—not that people want the same things, necessarily, but that they want the same range of choices. (785)

さらに、核を含む廃棄物や核の脅威がアメリカの歴史の下部世界^{underworld}に存在し、裏の歴史(“underhistory” 791)を形成している。

時の経過のなかで「色褪せたり、衰弱するものもある」。「欲望がそれを要請するのだろうか」(785)と語り手は推測する。しかし、人間の欲望であろうか。システム自体の欲望であろうか。前者であれば、人間が現状を望んでいることになるが、はたしてそうなのか。後者であるとするれば、人間の生命力や欲望、あるいは身体は、システムとどうかかわるのだろうか。抵抗するのか、すり寄るのか、知らんふりを決め込むのか。

この疑問が生じるのは、小説のクライマックス近くの二つの印象的なエピソードゆえである。

一つは、貧困のなかでも逞しく生きる12歳の孤児エスメラルダが強姦、殺害、遺体遺棄された後、巨大な商品広告版に彼女の姿が現れるとの噂で集まった尼僧 Edgar や群衆が実際に彼女の姿を見、悲しみや憐憫の情を通して「自分と他者が不可分であるような気になる。」(823)人間同士の繋がりや共感を体験する彼女たちは、機械やテクノロジーとは異なる、原初的な身体と感情の世界に回帰するのである。Inter-subjectivityの世界でもある。

Everything feels near at hand, breaking upon her, sadness and loss and glory and an old mother's bleak pity and a force at some deep level of lament that makes her feel inseparable from the shakers and mourners, the awestruck who stand in tidal traffic — she is nameless for a moment, lost to the details of personal history, a disembodied fact in liquid form, pouring into the crowd. (823)

この時、エドガーは独自の名前や歴史を持った、他者とは明確に弁別される実体的存在というよりは、「流体」として存在する。彼女は「肉体のない液状化した事実」(823) — このような言語、言説がデリーロの特徴の一つであろう — であり、自分自身ではあるが、同時に、群衆に融け込み、他者とひとつである。自即他。群衆はこの一体感の中で幸福である。神を見ている、神とともに至福の状態にあると言えるかもしれない。二つ目のエピソードは、彼女の幻想的/超現実的な最後である。彼女は死して、天国ではなく、「ウィルスの脅威が常に存在する」「^{サイバースペース}「^{サイバースペース}電脳空間に存在し続け、諸システムの呪縛を感じ、居心地悪く……ウェブの、ネットのパノミアを感じている。」(825) ³彼女の居心地悪さが示唆するのは、グローバルなサイバー空間が必ずしも人間の欲望ではないこと、必ずしも望ましいものではないということだ。

“*Keystroke 1*” (817) で描写されるように、エスメラルダ事件について情報を入力し検索すれば、真偽は別として、殺害状況や犯人について何らかの情報を得ることができるかも知れない。語り手の息子 Jeff のように、若い世代はコンピューターの万能性を信じ、テクノロジーの便利さを享受している。しかし、エドガー・尼僧が死んでコンピューターによって繋がる世界的ネットワークの一部となった時、エスメラルダ事件のような人間同士の繋がりや共感を実感することができるだろうか。人間が他者との繋がりを求める欲望自体が、無意味に、あるいは不要になるのか。個人は、そして身体は、他者なしに自律的に存在できるというのか。できはしまい。人は一人では生きてゆけない。ネットワークに繋がれて、サイバー空間の中で不死を得たエドガーが、幸福感や安心感に包まれていなかったように、身体はグローバル化やテクノロジーの過度の発展を欲望しているわけではない。その進展の欲望は、背後にあるシステム自体のものと考えてよからう。

エドガー同様重要な人物が、今は廃棄物アナリストでWaste Containment社の名誉役員でもあるが劇的な人生を送ってきた語り手ニックである。18歳の時、過失致死の罪で少年院送りとなった時、そこで体制側の欺瞞に落胆し、敵対心を持つ。しかし、ごちなく自己主張していた彼は今では体制に完全に順応・同化している。妻と親友の不倫を知っても、怒りも憎しみも感じず、むしろほっとする。彼が希求するのは「乱雑な日々。乱雑など屁とも思っていなかったかつての日々」(806)である。彼は「無秩序な日々を取り戻したいと思う。この世に生きてい

ると言い切ることができ、生身の皮膚が波打ち、傍若無人で本物だった日々。…他人から見れば脅威であり、自分でもわけがわからなく、謎でしかなかったかつて」(810)の自分に郷愁ノスタルジーの念を抱く。

一見成功者で人も羨む生活をしているように見えるニックがまさに希求しているとおりに生きているのが、孤児のエスメラルダだ。明確な固有性が取り返しのつかぬほど希薄になりつつある環境にあって、彼女は一秒一秒を本当に生きていると言える。「空き地に捨てられた衣服をあさり、食料雑貨店の裏で捨てられた果物を漁り、木立や雑草や取り壊された建物の瓦礫の中を走り回るが、躓くこともなく実に巧みな足取りで、森の神話に出てくる妖精のように」(810)、見とれるほど身軽に素早く、街を駆け抜ける。尼僧エドガーは「彼女に、眩いばかりの神の恩寵を見」、少女たちが住まう「路地に靈気を感じながら、別の世紀へ引き戻されたのではないかと思う。」(811) エスメラルダの周りには生命の躍動があり、時間が確かに流れていると感じられる。その少女が殺害された後、彼女の姿が広告板に現れるとの噂で現場に行ったエドガーは、前述したように、自分が群衆と不可分であるという一体感のなかでこの上もなく幸福である。悲しみなど群衆の様々な思いを語る「ことば」が尼僧の皮膚を刺すように語りかけ、そのことばが彼女の身体に自分が群衆一人ひとりと繋がっていることを語る。所与の制度的言語ではない原初的な「ことば」だ。この時、飛行機燃料の匂いが想起されるように、彼女は感覚的にも鋭敏である。これらの事実が示唆するのは、人間の繋がりネットワークという真実(a truth)を語ることばが今、彼女に語っているということ、そしてそれを聞けるのは、テクノロジーやグローバル経済の真っ只中に生きる身体でも、そこでの成功者でも、ネットのなかに取り込まれて不死を得た非物質的な「身体」でもないことである。

『アンダーワールド』のエピローグで語られた社会からさらに時代も科学技術も進んだニューヨークが、『コズモポリス』の背景である。ここでは時空間意識、アイデンティティや他者との関係性などはどのように変容しているのだろうか。そこで人間の身体はどのように応答するのか。どんな「言葉」が人に語りかけるのか。

2. イカロスの失墜と浮上

2-1. 時代のアンチテーゼとしての超富豪スーパー・リッチ転じて極貧スーパー・プア

『コズモポリス』で描かれるのは、28歳にして相場アナリストとして成功し、投資顧問会社を持つ大金持ちで、ヨーロッパの名家の女性と結婚してほどない主人公エリック・パッカーの、2000年4月のある一日である。世界は「光線によって築かれた最先端の空間」(102)であり、コンピューターとインターネットが世界中に浸透している。「彼が死んでも、彼は死なない。世界が終わるのだ」(6)とまで語り手に語らせる成功者だ。「惑星に植民できるほどの金を儲けた」(129)彼は、この日一日でそれを失う。Rawlingsによれば、「Eric はKerry の“phonetic anagram”であり、オーストラリアのメディア王である故 Kerry Packer を示唆するのかもしれない。」デリーロは、この高度テクノロジー社会の具体的な姿を、登場人物のVija Kinskiに語らせている。エリックの理論担当主任であるからその役にはうってつけであろう。彼女によれ

ば、「すべての富は富のための富になってしまい……お金はその物語的な性質を失い……それ自体にしか語りかけなくなった」；「資産という概念も日に日に、毎時間ごとに変わっていて……権力に関するものではなく、個性や能力とも無関係である」；「時間は自由市場システムに取り込まれており、現在というものは見出しにくい」；「未来はサイバー資本によって作られ」、制御不能な市場と巨大な潜在的投資力の未来が常に世界を支配するようになった。(77-79)しかし、より重要なのは、エリックが「最終的には制御しきれないシステムを扱っている」(85)こと、そして「時間の加速を正すような何かが、自然が多少なりとも正常に戻るような何かが起ころうとしている」(79)ことを、彼女が彼に指摘していることである。現在の経済システムの勝者エリックの限界と、何らかの揺り戻しの可能性である。彼女は彼が「大きなヴィジョンと尊大な行動の男であり、ディスク上に、肉体を超えた観念のなかで生きることができるのだから、死ぬことなどない。これまでも、これから、決して疲れきること、混乱すること、壊れることもない」と言うものの、「良いにしろ悪いにしろ、今日はすべてが起こる日」(105-6)だと語る。そして彼女の言葉通り、彼は今日、金をすべて失うが、「生きることが始められる」(107)のである。イカロスは失墜して、再浮上する。

書評は判断が分かれるが、失敗作と評するものが多いようだ。⁴ 確かに暴力と性がこの小説には満ち溢れ、センセーショナルであるし、一日のうちに一見同じようなエピソードが何度も起こるのは構成としても粗野であり、洗練された小説とは言えないかもしれない。しかし、我々読者は、^{スーパー・リッチ}超富豪転じて一文無しのエリックに、時代のアンチテーゼとしての役割を見出すことができる。彼の一日を通して、この時代のシステム下での身体のあるようさと応答を見ることができる。『コズモポリス』は現代世界と身体についての小説である。身体というテーマは『アンダーワールド』、『ボディー・アーティスト』、『コズモポリス』と進展していく。ただし、『ボディー・アーティスト』は身体と言語に、より大きな焦点を当てていると考えられる。

グローバル化と高度テクノロジー時代にあっても気づく変化が、時空間の概念や言葉の変遷であろう。今・この時空間はネットの時間と空間に取り込まれてしまったと言える。冷戦終結後のグローバル経済とアメリカ合衆国の世界支配の結果として9.11事件が起こったとすれば、デリーロは事件を予知したと言えるが、この惨事の直後に彼はエッセイ“In the Ruins of the Future”を書き、冒頭で、われわれが永遠に現在というよりは未来のなかに、サイバー資本のユートピア的輝きのなかに、生きていと述べている。

In the past decade the surge of capital markets has dominated discourse and shaped global consciousness. Multinational corporations have come to seem more vital and influential than governments. The dramatic climb of the Dow and the speed of the Internet summoned us all to live permanently in the future, in the utopian glow of cyber-capital, because there is no memory there and this is where markets are uncontrolled and investment potential has no limit. (33)

現代は線的時間言説での「現在」というものが、そしてその緊迫した時間を意識することも、その流れを実感することも、困難な時代だ。ダウの劇的上昇、ネットのスピード、サイバー資本

には確たる過去も記憶というものも存在しないからだ。この時間論が小説に、エリックの理論担当主任の言に反映されている。かくして、我々は未来に生きることになり、「現在」も身体性もますます希薄になっていく。

ウェブや新しい技術の言語が支配するなかで、多くの言葉が時代遅れになっていくことにも気がつく。社会状況の変化とともに、物が消滅し、それを表現していた言葉が消える。聴診器、ATM、walkie-talkie、ワードプロセサー、現金、電子手帳、オフィスなどの言葉が消えていく。語の定義や意味で変化するものもあろう。日々新しくなっていくシステムを相手に経済的に成功するためには、スクリーン上の棒グラフやチャートの動きの中に隠されたパターンを読み取らねばならない。特定の通貨の変動に隠されたリズムを、それから発せられる言葉を読み取らねばならない。主人公のリムジンに搭載されたコンピューター上に映されるデータの図表のなかには、「鳥の羽や中が細かく分かれた貝の、有機的な形状を結びつつある」生命が「ことば」を発している。その「生命圏のうねり」(24)の「ことば」を聞き取らねばならない。“pictorial language”の一種、新しい言語である。

時代の成功者エリックはこのような変化に満足しているのだろうか。この日、大統領の訪問で交通規制が実施されたり、有名人の葬儀パレードや映画ロケがあつて困難ではあるが、子供の頃からの馴染みの床屋に行くことに、彼はこだわる。俗語では、“haircut”は大金を失うという意味であるから (Valentino 158; Rob Walker “DeLillo's *Cosmopolis*” から引用している)、象徴的に、彼は自己破滅へと突き進んでいることになる。しかし彼が、床屋にある毎年同じ石油会社のカレンダー、いくつもある鏡、そして椅子に郷愁を覚えているのは、一見奇妙なようだが、それが象徴することは重要である。それぞれ、線の時間と過去、鏡に映る自分自身つまり身体性/実体性、リムジンの中でスパイカメラが常時回転していることとは異なる旋回—これらのものへの郷愁である。子供の頃から父に連れられて行った床屋で理髪師のAnthony Adubatoは、時々話題を加えながら、父とのいつも同じ思い出話をする。ここでエリックは、父との思い出、記憶、線の時間を回復する。床屋に行けば、失われた今・ここ、躍動する生を取り戻し、現在という時間が再び流れ始める。もちろん、彼はこのことを意識してはいまい。しかしこれらは、彼の身体の無意識の欲望なのだ。システムの欲望に抵抗する身体は、自ら時代のアンチテーゼの言説を擁している。

2-2. システムとの前哨戦の場としての身体

エリックはチップで、ディスク上で、データとして永遠に生きることを希求してきた。肉体は交換可能であり、余分なもので、捨て去りたいとすら思う。不滅、永遠の生を望み、ウェイトトレーニングで体を鍛え、毎日の健康チェックアップを欠かさない。彼にとって身体は、超音波心臓診断装置などで情報の波に変換される。有機物としての身体・肉体はまったく異なるかたちで存在しているのだ。経済システムのなかに蠢く様々な先端部分の一見混沌そのもののような動きから、世界を統べる確たる秩序や整合性を求める彼の目下の関心は、彼を破産に陥れかねない円の高騰であり、彼はその背景にある規則性つまり合理的解釈、これまでにない新しい知識を模索している。しかし、そもそも彼の前立腺が非対称である。身体が彼を裏切って

いるのだ。身体はシステムに抗する前哨である。闘いは身体のDNAにすでに組み込まれていたと言える。エリックの不滅への夢を阻むのが、この日彼が何度か体験する痛みであることを我々は見落としてはならない。痛みは身体から発せられる「ことば」であり、不自然なほど旺盛な食欲も性的欲望も同様だ。小説は、この痛みが徐々に彼に身体性を自覚させ、彼をシステムから自由にしていくことを語る。

エリックはリムジンの中で毎日行方不明の前立腺の触診に、痛みを感じる。痛みがさまざまな経路を走り、結節腫と脊髄に伝わる時、彼は「生身の体で一理論上は捨て去りたいと思っている構造体で—ここにいます」(48)ことを思い知らされる。次に、彼は女性ボディガードと性交した後、彼女にスタンガンで自分を撃たせる。もっと強い刺激を求め、まだ自分が知らないことを知りたいからだ、電気ショックの痛みと痙攣のなかで、「理性の機能を剥奪されて、奇妙に高揚し」ながら、彼は15分ほどホテルの床に転がっていることになる。こうして自分が読めない円の高騰とスタンガンの痛みのおかげで、彼は「大脳新皮質の影響下から脱し、脳の下等な領域と調和し、直感的かつ正確な行動を取る必要から、あるいは独自の判断を下し、独立した主義と信念を貫く必要性から開放される。」(115)合理性や理性から自由になるのだ。

最後に、身体性を強烈に意識し、テクノロジーには変換不能なもの—自分自身であり、その身体—があることを知り、世界を勝ち得て、再び、いや真に生まれることになるのは、テクノロジーの進歩についていけず自分が解雇した元従業員の逆恨みから銃で撃たれて、苦痛に苛まれるときである。エリックはいつも「超微粒子になりたいと思っていた。肉体を超越し……与えられた限界の外で—チップで、ディスク上で、光を発しながら回転するデータとして、そして意識として—生きるのである。」(206)しかし、この不遜な夢・欲望を阻むのが、そして彼を彼自身と身体に引き戻すのが痛みなのだ。

He'd always wanted to become quantum dust, transcending his body mass, the soft tissue over the bones, the muscle and fat. The idea was to live outside the given limits, in a chip, on a disk, as data, in whirl, in radiant spin, a consciousness saved from void. (206)

But his pain interfered with his immortality. It was crucial to his distinctiveness, too vital to be bypassed and not susceptible, he didn't think, to computer emulation. The things that made him who he was could hardly be identified much less converted to data, the things that lived and milled in his body, everywhere, random, riotous, billions of trillions, in the neurons and peptides... He'd come to know himself, untranslatably, through his pain. (207)

エリックは痛みを通して、自分自身を、「データの集積に変換しようのない」自分を知る。何度か肉体的苦痛を体験した後、「物質的なもの、偉大なもの、記憶、感情」の価値を知り、「世界をしっかりと掴む。」(207)様々な文化の差異を消滅するグローバル化とテクノロジーの時代に、独自性、現在や過去・記憶、物質的なもの、不安などの感情を回復する。『アンダーワールド』のエリックは、肉食獣のような衝動、日々駆け立てる大きな興奮の感覚、生き抜こうという純然

たる、目くるめくような欲求を持って生きていたかつての自分を取り戻すことを夢想した。『コズモポリス』のエリックは痛みの深遠から、ニックが希求するような自分自身を、そして世界を得ていったのだ。

2-3. エスメラルダの「ことば」3変奏

エリックは身体性を意識し、テクノロジーではなく身体として自分がまさに生きている世界に回帰する。個としての分別以前の、いわば原初的な自即他の世界を、痛みを通して体験する。その過程で彼は三度、他者との一体感を体験する。この時、彼はテクノロジーとは異なる別世界に参入し、新しい「ことば」を聞くことになる。エスメラルダのエピソードで尼僧エドガーが聞いたのと同じような「ことば」の変奏3例が、『コズモポリス』で提示される。しかしその前に、エリックがアパートを出た時、通りのクラクションの騒音の中に、すでに彼が、何か「ある根本的な痛み(“ache”)の音、原初的な響きがするほど古い哀歌を聞いて」(14)いたことを、我々は思い出す。痛みの音はそれが語る「ことば」であり、三つのエピソードにおいて彼は具体的にそれを聞くことになる。

まずエリックは、修復工事中の劇場で「テクノ・レイヴ」を聞く。繰り返される電子音楽の大音響で、彼はこの世とは別の世界に誘われているような気がする。音楽が「語り、悶える。何か意味あることを言っているようだが、そうではない。彼はこれまでに使ってきたどんな言語にも属さない言葉を聞く。」(126)十代の若者たちは麻薬の助けを借りて、ダンスし、ひとつになり、「互いに溶け合っており、個人として萎びてしまうことはない。」(127)劇場の舞台上方から彼らを見下ろしているエリックは、彼らが使っている麻薬を使っているわけではないが、自分が自分ではなく、彼らになりつつあることに気がつく。若者たちのこの体験はノヴォという麻薬を介して得た実感で、薬の力による脱自、譫妄状態である。しかも、エリックは完全に彼らと一体になったわけではない。しかし、この過渡的な体験を経て、自分も愛好するラップ・ミュージシャンである Brutha Fez の葬儀パレードに参加した時には、実際に自即他の状況にまで至っている。大きな祈りの声、街中に響くような叫び、拍手が、そして音楽が車中の人々や歩道にいる群衆へと浸透していき、はっきりとしたひとつの感情が生まれる。「酔うような一体感の喜び(“a joy of intoxicating wholeness”)—フェズと自分たち、死者と仮に生きている者たちとの一体感」(135)である。

Now music filled the night, ouds, flutes, cymbals and drums, and the dancers whirled, counterclockwise, faster with every turn. They were spinning out of their bodies, he thought, toward the end of all possessions.

The chorus chanting vigorously now.

Because whirl is all. Whirl is the drama of shedding everything. Because they are spinning into communal grace, he thought. And because someone is dead tonight and only whirl can appease their grief. (138)

様々な楽器の音が空中を満たし、人々は反時計回りに—このことは現状とは逆の事態に向っていることを示唆する—旋回する速度を速める。こうして「すべてを捨て去り」(138)、自分自身

から超脱する。我々はここに宗教的行為／儀式と同様の効果を発見する。

一体感が再び経験されるのは、第三の強烈なエピソードで、映画ロケに加わり、数百人のエキストラとともに裸でアスファルト路上に横たわった時である。エリックは、「何十年も通行人によって踏み固められたチューイングガムの様々な肌触りを感じ」、暑い地面の匂いを嗅ぐ。「自分の体がここでは馬鹿みたいに感じられる。」そして通りが静まりかえり、話し声も止み、裸の皆が身動き一つせず、ひとつにまとまった塊になると、彼は「すべての肉体の存在を感じる。皮膚呼吸、体温と血流。そしてさまざまな異なる人々がすべて同じに見える。…一緒に生きると同時に一緒に死んでいる。」(174)この時、彼の裸の皮膚に語りかけることばは、尼僧エドガーが聞いたものと同様のことばであろう。

3. ^{スーパー・リッチ}超富豪転じて^{スーパー・ブア}極貧の生き直しと身体のコスモポリス

『アンダーワールド』の時代そしてエスメラルダ・エピソードの発展として『コズモポリス』を読んできた。資本が文化内の微妙な差異を焼き尽くし、すべてが均一化する状況から、後者の小説では時代もシステムもさらに進む。現代はいわばグローバル化と高度テクノロジーの高原^{plateau}であり、転換点であることは、9.11事件以降明らかになったと言える。このような時代状況にあって、天使エスメラルダのような生の躍動を目撃することも、「エスメラルダの奇跡」が起これ、殺害された少女が人々に人間同士の繋がりネットワークを気づかせることも期待できないかもしれない。しかし、それゆえにこそ、意識的であれ無意識的であれ、人は原初的なつながりを求めて現代の大都市を迷い、彷徨する。時空間や言葉に顕著に現れる時代の変化のなかにあって、勝者たる主人公エリックは、身体としてではなくチップで、ディスク上で、データとして永遠に生き続けることを希求してきた。しかし、この不滅の夢を阻むのは、無用で捨て去りたいと常に思っていた自身の身体である。自身の拡大と支配を欲望するシステムと闘う自然のままの身体は、痛みを通して彼が身体的存在であることを意識させ、システムとの対峙を促す。痛みは身体が発する欲望の、そして抵抗の「ことば」である。そして闘いを通じて、合理性や理性から開放され、彼は自由になってゆく。

システムの中で失われた今・ここ、現在という時間の時計のスイッチが入り、真に生き始める前に、エリックは三度、エスメラルダ・エピソードで尼僧エドガーたちが聞いた、人間同士の繋がりと共に裸で暑いアスファルトに横たわった時の一体感である。この時、制度的言語とは異なる「ことば」が彼の皮膚に、したがって身体全体に、同じように生きる自分の、そして他の人々の物語を語る。そして最後に彼は、固有性、時間・記憶、物質的なもの、不安などの自然な感情を、「世界」を取り戻す。この点では、『コズモポリス』は28歳の現代社会の覇者の自己形成小説^{bildungsroman}だ。Valentinoによれば、“cosmopolis”には“world city”と“world citizen”の意味がある。(152)現代社会の物語であると同時に、この小説は主人公の魂の葛藤と、身体のありようを示唆する物語なのだ。グローバル化と高度テクノロジー社会にあって、本来

の、真にあるべき自己を回復する過程である。その際、身体はロマンティックな機能を果たすことに読者は気がつく。そして、身体がシステムとの闘いに勝利できるという、大いなるロマンティズムがこの小説の底に流れていることを知る。

2000年4月のこの長い一日のなかで、主人公は自分の分身・他者性たる、Benno Levinを象徴的に統合しなければならない。解雇された元従業員で、彼同様、前立腺は非対称であるが、「時計も持たず、エリックとはまったく異なる総体のなかで時間を考える。自分の時間のスパンを膨大な数量の世界—地球、星、光年、宇宙の年齢—と対比してとらえる。」(59-60) また、「世界に自己充足したものなど何もなく、すべてが他のものに入り込んでいる」(60) と考える。多分に狂気を疑われはするが、一即全、全即一、自即他、他即自という存在のありようを直感しているのではなかろうか。そして、エリックが株価のチャートが語る「ことば」を読み取ることを望んだのとは異なり、所与の制度的言語で一万ページ、エリック殺害にまつわる自分自身の物語を手記に書きとどめたいと思っている。時間感覚、世界理解、言語が、エリックとはちがうのだ。小説の最後では、撃たれたのがエリックなのか彼の分身ベノなのか、わからないように書かれているが、エリックの新生を示唆する上で不可欠の登場人物である⁵。

エリックは自分の分身／他者性を統合する。それを可能にするのは身体である。さらに具体的に言えば、痛みを感じられる生身の肉体であると同様に、他者との一体感を求める皮膚の欲望と、腸の欲望である食欲⁶であり、これが象徴的には、自己形成の文脈における母の役割を示唆する。母は親密に接触し、乳・滋養を与えて養育する。そして記憶・時間・血のつながりの回復を促す父が亡霊として、床屋での思い出話を通してエリックの自己形成に寄与する。彼に自分の物語を語る言語を付与すると考えてよい。かくして象徴的な父母の助けによって、エリックは自分の分身を統合してひとつの身体になってゆく。小説の最終場面では、彼のハイテク腕時計が、幻想的/超現実主義的に、彼の死後の場面を写し出す。テクノロジーはこれから訪れる未来を描き出す。しかし現実のエリックは、撃たれたものの、まだ瀕死の状態である。生き直すのには、まだ間に合う。時間は逆行するはずである。身体のロマンティズムは時間の流れをも変える。

註

1. 拙論「身体の知/テクノロジーの痴—Don DeLillo, *Underworld* (1997)における現代世界の『実相』と二つの知」(『現代アメリカ文学と仏教—西洋と東洋、宗教と文学を越境する』、岡山大学文学部研究叢書28、2009年、第8章：164-79)を参考にされたい。粗筋等の記述に重複する部分があることを断っておく。
2. 拙論「時の曼荼羅・曼荼羅の時間—Don DeLilloのボディ・アーティストの身体が表象する時間」(同書第9章：180-92)を参考にされたい。粗筋等の記述に重複する部分があることを断っておく。
3. 『アンダーワールド』では、エドガー・アラン・ポーが死んで、ネット空間にいる。『コズモポリス』の結末では主人公が腕時計に自分の未来を見る。このようなSF的あるいは超現実的描写は、両小説の背景がハイテク社会であることと関係があるのかもしれない。あるいは、インタビューで語られるように、デリーロが頭に浮かんだイメージ＝言語を、また彼が聞いた文の音やリズムを、そのまま記したのかもしれない。
4. 書評は“*Cosmopolis Media Watch*”や Kakutani, Updike, Kirn, Morrisonなどを参考にした。Kakutaniは以下のように酷評している。

- [Eric is] a cartoon nihilist, a comic-strip capitalist pig, and the story of his crosstown trip to the barber, for all its melodrama and violence, turns out to be a long day's journey into tedium.
5. 分身としての機能を持つが、エリックを射殺するベノがエリックから剥ぎ取った紙幣を彼の顔に擦りつける描写がある。この行為は、渡辺も指摘するように、「グローバルな電子マネーから、手垢の付いたローカルな紙幣へと、先祖返りしたことを示」(26)す役割も果たしている。
 6. 食べることはデリーの小説世界では一つの興味深いモチーフであり、テーマとも深くかかわる。*White Noise* (1985) でも、実際に有毒化学物質流出事故が起こり、その後も避難訓練をするが、主人公 Jack Gladney 一家はよく食べる。この小説では、死の恐怖という「耳ざわりの騒音を消すためにそれにかぶせ」(『研究社新英和大辞典』第六版)で聞こえなくする音—白色ノイズ—の一つが、食べることであり、テレビを見ることであり、スーパーマーケットで買い物することであるとえられる。『コスモポリス』では、エリックはたまたま会うことになる妻とこの日何度も食事をする。また、日本円の動きが説明できない時、彼は「ほとんど飢えているくらい、腹が減っている。時々、常に食べ続けていたい、人々の顔に向かって話しかけたい。生身の人間たちの空間に暮らしたい、と思う。」(63-64)この食欲も彼の新生を促す重要な要素とえられる。

引証文献

- Updike, John. "One-Way Street : A new novel by Don DeLillo." *New Yorker* (31 Mar. 2003) : n. pag. Web. (accessed 28 Mar. 2014).
- Valentino, Russell Scott. "From Virtue to Virtual : DeLillo's *Cosmopolis* and the Corruption of the Absent Body." *Modern Fiction Studies* 53-1 (Spring 2007) : 140-62. Print.
- Kirn, Walter. "Long Day's Journey Into Haircut." *New York Times* (13 Apr. 2003) : n. pag. Web. (accessed 28 Mar. 2014).
- Kakutani, Michiko. "Headed Toward a Crash, Of Sorts, in a Stretch Lomo." *New York Times* (24 Mar. 2003) : n. pag. Web. (accessed 27 Mar. 2014).
- DePietro, Thomas, ed. *Conversations with Don DeLillo*. Jackson : Univ. Press of Mississippi, 2005. Print.
- DeLillo, Don. *Underworld*. London : Picador, 1999. Print. なお、上岡伸雄・高吉一郎 訳『アンダーワールド』(東京 : 新潮社、2002)を参考にさせていただいた。
- … "In the Ruins of the Future : Reflections on Terror and Loss in the Shadow of September." *Harper's Magazine* (Dec. 2001) : 33-40. Web. (accessed 28 Mar. 2014).
- … *The Angel Esmeralda : Nine Stories*. New York : Scribner, 2012. Print.
- … *Cosmopolis*. London : Picador, 2004. Print. なお、上岡伸雄 訳『コスモポリス』(東京 : 新潮社、2013)を参考にさせていただいた。
- … *Mao II*. New York : Penguin, 1992. Print.
- … *White Noise*. New York : Penguin, 1998. Print.
- … *The Body Artist*. London : Picador, 2001. Print.
- … *Libra*. New York : Penguin, 1989. Print.
- Morrison, Blake. "Future tense." *Guardian* (17 May 2003) : n. pag. Web. (accessed 8 Apr. 2014).
- Rawlings, Scott. "The Last Economist : Adam Smith and the transvaluation of values (cyber capitalism in DeLillo's *Cosmopolis*)". *Double Dialogues* Issue Eight (Summer 2007/08) : n. pag. Web. (accessed 9 Apr. 2014).
- 渡辺克昭. 「『崇高』という病—『享楽』の『コスモポリス』横断」。東京 : 『英語青年』150-3 (June 2004) : 24-27. Print.
- "*Cosmopolis* Media watch." http://perival.com/delillo/cosmopolis_media.html : n. pag. Web. (accessed 10 Apr. 2014).